

プランゲ文庫誕生の一コマ

—プランゲ博士の書簡紹介を兼ねて—

大島康作 藤原夏人 中村淳一

I プランゲ博士の経歴⁽¹⁾

ゴードン・W・プランゲ (Gordon W. Prange)

1910年アイオワ州生まれ。アイオワ大学卒業後(学士1932年・修士1934年)、ベルリン大学へ留学。1937年、アイオワ大学より博士号(哲学博士)を授与され、メリーランド大学の講師となる。1946年から同大学歴史学正教授。そのかわり、占領軍の一員として来日し、1945年12月から1949年6月まで参謀第二部(GⅡ)戦史室歴史主任兼太平洋戦史主任、その後1951年6月まで同戦史室室長を歴任。著書に『トラ・トラ・トラ』などがある。1980年死去。博士が帰国に際してメリーランド大学に送った大量の日本関連の資料は、後に「プランゲ文庫」として整理され、占領期の日本を研究する上で欠かせないものとなっている。

II プランゲ文庫成立の背景

占領軍による検閲は、検閲を担当した民間検閲支隊(Civil Censorship Detachment, CCD)が1949年10月をもって廃止されたことで一応の終息を迎えた。検閲のために接收された大量の資料はやがて処分されることになったが、これに注目したのが、当時GⅡにおいて戦史編纂にたずさわっていたプランゲ博士である。博士は検閲に直接関わったわけではない⁽²⁾。だが博士は「歴史学者」として、この大量の資料を保存することが占領期の日本の状況を知る上できわめて有用であると認識し、自分が在籍しているメリーランド大学へ送

ることを決意したのである。同じ時期、日本関係の資料収集に力を入れていたスタンフォード大学やハーバード大学も資料の獲得に動いていたため、博士は資料獲得にあらゆる努力を惜しまなかった⁽³⁾。今回紹介する、博士がメリーランド大学の総長に宛てた長い手紙は、博士がいかに資料獲得に熱心であったかを物語っている。博士の情熱はやがてG IIの部長であったウィロビー少将を動かし、1949年12月、ついに資料は博士の手に渡り、メリーランド大学に送られることになった⁽⁴⁾。博士自ら「資料戦争」と呼ぶところの資料争奪戦において、最終的な勝利を収めることができたのは、博士の並々ならぬ熱意の賜物であろう。資料はその後、博士の監督のもとに船積みされ、横浜からアメリカへと送られた⁽⁵⁾。

最も一般的なプランゲ文庫成立の前史は以上のとおりである。とはいえ、これとは別の解釈を試みているものがないわけではない。例えば、メリーランド大学は強引に資料を受け取られたのだ、という推測をしているものもある⁽⁶⁾。また博士は、先のメリーランド大学総長へ宛てた手紙の中で、自分がいかに大学のために仕事をしているかを熱心にアピールしており、そこに博士の世俗的な一面を垣間見る人がいるかもしれない。資料が博士の手に渡った具体的な経緯を、実証的に裏付けることは大変困難であるため、若干解釈の幅が広がるのは致し方のないところである。

ただ、いずれにしろ、博士なくしてプランゲ文庫が成立し得なかったことは言うまでもない。同時に、博士が資料獲得にすさまじいまでの情熱を傾けたことも事実である。他にどのような理由があったにせよ、獲得しようとしている資料そのものに対する高い評価がなければ、ここまで情熱を傾けることはなかったに違いない。なぜ博士は、これら資料の価値を高く評価したのであろうか。恐らくそれは、博士自身の歴史に対する認識や歴史研究の手法と無関係ではないように思われる。一言で言えば、博士の研究手法は、きわめて実証的なものである。資料（この場合は特に「史料」）をもとに、緻密に、かつ丹念に歴史像を「復元」していくその研究姿勢は、史料に対する深い信頼の上に成り立っている。博士の代表作『トラ・トラ・トラ』が、当初の予定よりも大幅に枚数が増えたため、商業ベースにのらないとの理由で完成版の出版を断られ、生前には出版されなかった⁽⁷⁾というエピソードは、博士がありとあらゆる史料を集め、それを徹底的に掘り下げた結果得られる客観的な歴史像の構築に、何よりも重きを置いていたことをうかがわせる。事実、『トラ・トラ・トラ』の記者で、博士と親しい間柄にあった千早正隆氏は、「博士の研究、調査はわれわ

れ日本人からすると、異常と思われるほど徹底的であった」と回想しており、また「彼はその著作を他から批判の余地のないクラシックの域にまで高めたいと考えていたから、いつまでたっても出版のふん切りがつきかねていた」という^⑧。きわめて実証的な手法をとる博士にとって、検閲のために接収された大量の資料は、まさに宝の山に思えたことであろう。

－註－

- (1) プランゲ博士の経歴については、奥泉栄三郎「『トラ・トラ・トラ』の行方とその周辺」『出版研究』30 2000年3月 p.115-136を参照
- (2) フランク・ジョセフ・シュルマン「米国における日本占領研究資料について－メリーランド大学所蔵プランゲ文庫の紹介を中心として－」『占領教育史研究』第1号 1984年7月 p.55
- (3) 村上寿世「プランゲ文庫について・第一報」『出版クラブだより』338号 1993年3月 p.3
- (4) 村上寿世「プランゲ文庫－占領軍検閲局に残された日本の出版物」『図書館雑誌』88 1995年8月 p.612
- (5) 村上「プランゲ文庫について・第一報」前掲誌 p.3
- (6) 奥泉栄三郎「プランゲ文庫（上）－連合国日本占領期検閲資料－」『日本近代文学館』第60号 1981年3月 p.8
- (7) ゴードン・W・プランゲ著 千早正隆訳『トラトラトラ（新装版）－太平洋戦争はこうして始まった－』並木書房 2001年 p.437-438
- (8) 前掲書、p.434-435

III 資料紹介

プランゲ博士書簡 バード・メリーランド大学総長宛 (1949年11月29日付)

THE MATERIAL REPRODUCED IN THIS
COPY MAY BE PROTECTED BY COPYRIGHT.
THIS COPY IS MADE FOR PERSONAL USE
ONLY AND MAY NOT BE REPRODUCED.

Tokyo, Japan
29 November 1949

President Harry C. Byrd
University of Maryland
College Park, Maryland

My dear President Byrd:

This is another letter in regard to the shipment of library materials to Maryland. I did not think that events would crystallize quite as fast as they have when I wrote you on 22 November but things are moving swiftly out here and I am compelled to move with them or be left behind. I believe that a major decision will be reached concerning some of the most valuable material in all Japan by the end of December, possibly sooner, so I am writing you in detail and hope that you will be able to give me an answer to some of the points in my letter before the decision is reached. Your answers to some of my questions and suggestions could very well provide me with exactly the right kind of ammunition to fight what I call "The Battle of the Books." There are numerous problems and many angles in this situation out here, some of which are very complicated and some of which it is not necessary to go into. I shall try, however, to give you a bird's-eye view of the entire scene both present and future (I should say potential) so that you can see what is involved and act accordingly.

First of all I would like to describe to you in the strictest confidence the prospects for acquiring for Maryland what could very well become one of the finest collections of materials on the War in the Pacific and the Occupation of Japan anywhere in the United States. I am not exaggerating one iota when I say that if things materialize Maryland could have as good if not a more valuable collection on the above mentioned subjects than the great Hoover War Library at Stanford. I should like to add, however, that they are one of my chief competitors and it is the pressure from such groups that I must fight off in order to achieve the goals I have in mind. I should like to emphasize that I hesitate to raise any false hopes but I do believe the prospects are good and if you can help me and back me to the limit I am sure that I am going to acquire at least a fair portion of what will be made available soon and what will, undoubtedly, be made available within the forthcoming year. Let me discuss these materials in the potential order of their availability.

<解説>

この書簡は、占領期の1949年11月、ブランゲ博士が、母校のメリーランド大学バード総長に宛てたもの。同年10月31日付で、検閲を担当した民間検閲支隊（CCD）が廃止され、占領期における検閲が終了したことを受けて、検閲活動を通じて入手した資料の獲得・保存につき、母校メリーランド大学のため奔走するブランゲ博士の様子がうかがわれる書簡である。この資料は現在メリーランド大学に保管されており、利用に際しては、同大学への複写申請手続きが必要となる。

同資料の概要は以下のとおり

資料名：The letter to Harry Clifton Byrd from Gordon Prange, dated November 29, 1949

コレクション名：Papers of Gordon W. Prange, Special Collections, University of Maryland Libraries

メリーランド大学HPアドレス：<http://www.umd.edu/>（最終アクセス日2004年1月16日）

訳文（抜粋）

「この手紙は、収集資料をメリーランドへ向けて船積みする件に関するもう一通の手紙です。こちらでは事態が急速に進行しており、私はその動きについていくか取り残されるかといった状況です。私は、日本で最も貴重な資料のいくつかに関する大きな決定が、12月末まで（あるいはもっと早く）なされるであろうと思っています。そこで私は、その決定前に、あなたに事の詳細をお知らせし、いくつかの点に関して返答がいただけることを希望しております。あなたの返事は、私が「資料戦争」と呼ぶところの闘いに有力な武器となりうるでしょう。現状では、多くの問題、多くの見方がありますが、私はあなたが何が必要かを理解し、それに応じて行動できるように、現在と未来の可能性の全体をみわたせる鳥瞰図を提供したいと思います。

最初に、アメリカ国内で、太平洋戦争と日本の占領に関する最も立派な資料のコレクションの一つになるであろう資料を、メリーランドのために手に入れる見通しを内々に説明します。もしこれらの事が具体化すれば、メリーランドは、上述のテーマに関して、あのすばらしいスタンフォードのフーパー戦争図書館にあるのと同じぐらい優れた資料を手に入れることになるであろうと私が申し上げるのは誇張ではありません。しかしながら、彼らは私の主要な競争相

手の一つで、これらグループから受けるプレッシャーこそ、私が心に描くところの目標を達成するために、打ち負かさねばならないものなのです。私はうわべだけの希望を喚起することには躊躇を覚えています。資料獲得の展望は明るく、もしあなたが力の限り私を支援してくださるのなら、私は、すぐにでも、あるいは来年のうちには、利用可能な資料のかなりの部分を手に入れるという確信を持っています。これらの資料について、手に入れられる可能性がある順に話を致しましょう。

1. G II 歴史課図書館資料

これは私が歴史課の中の G II 図書館から発送している定期刊行資料です。私があなたへ最初に手紙を書いた時、メリーランドへの船積みが可能で資料が 2,500 冊から 5,000 冊あると述べましたが、私はこれまで 2,500 件以上の資料をメリーランドに送りました。加えて、それ以外の 3,000 から 5,000 の資料を 9 か月以内に船便で送付できるという明るい見通しも立っています。これら資料は、それ自体が太平洋戦争や日本の占領期の研究に非常に有用ですが、その他私が発見したこれとは別の文書、図書、新聞のコレクションがあります。これらは、もしあなたと私によって正しい手続きがタイミングよくとられるならば、あるいは手に入れられるかもしれません。というわけで、2. 以下ではこれらの資料について述べます。

2. 民間検閲支隊資料 (CCD コレクション)

ご存知の通り、G II は多くの課と、およそ 2,000 人の将校、下士官、文官を抱える GHQ 中の大規模かつ強力な部局です。最も重要な部門の一つ、検閲部門はちょうど廃止されましたが、この組織は文字通り、あるいは象徴的な意味においても、日本の占領期についての第一級資料の山です。それらの文書や記録の内容記述を同封致しますが、(もちろん十分に情勢を知らされていなければならない) 図書館員のロベルスタッド氏以外にはお見せにならないよう、願います。そこには、私がメリーランド大学図書館のために手に入れようとしている資料について書き記しておきました。計画通りにいけば手に入れられそうな資料には印 (クエスチョンマーク) をつけておきました。いつもこのような但し書きをつけなければならならず、申し訳ありませんが、私の手紙を読んでいただければ、なぜそれが必要なのか、ご理解いただけることと思います。

a. 日本の図書

まずは日本の図書からです。CCD コレクションの中には70,871冊あります。これらは事実上、占領期間中に日本人が研究したあらゆるテーマを網羅しております。それらはすべて日本語で書かれており、占領初期四年間の日本人の考えや重要なテーマに関する最善の指標となるものです。これらの図書は、多くが印刷されるとすぐに日本の出版社によって CCD まで届けられ、ていねいに取り扱われたため、非常によい保存状態でした。私が同封した CCD の内容記述に含まれているこれら図書の取り扱いに関する勧告をご覧ください。これらの資料の取り扱い勧告は CCD を運営している将校や文官によってなされ、可否の判断のため、ウィロビー少将へ渡されました。これら資料は議会図書館に収められるべきと考える人々もいれば、スタンフォード大学のフーバー戦争図書館へ送られることを望むグループも存在します。しかし私は、これら資料を私たちの大学図書館のために手に入れようとしております。私がウィロビー少将と親しい間柄であること、また彼も同じく、私がここ日本に滞在することに許可を与えていることに関してあなたに感謝していることは、非常に幸運なことです。あなたがたの方でもある程度の時間と考慮が必要だと思いますので、この手紙で詳細に立ち入りますが、私は目的が手段を正当化すること、メリーランドのためにこれら資料を手に入れるべく、我々の力の及ぶところ、あらゆる手を尽くさねばならないと確信しております。

b. 日本の雑誌及び小冊子

82,287点ある日本の雑誌、小冊子は、当方の図書館員と共に調べたところ、非常によい保存状態でした。あなたが想像するあらゆる種類の雑誌がこのコレクションの中に含まれており、現在に至るまでの占領期の雑誌をすみずみまでカバーしております。マッカーサー元帥による占領体制下の日本を研究対象とするまじめな研究者なら、これらの雑誌や小冊子が値段のつけられないくらい貴重なものだということに気づくでしょう。

c. 日本の新聞

最後に 689,690点ある日本の新聞についてですが、私はこれらの資料も調査し、いくつか注意が必要なものがあるものの、大部分がよい保存状態であることがわかりました。私は、このコレクションが、日本占領に関してどの図書館も手に入れたがる最も貴重な単一のコレクションの一つと思います。このコレクションは現在までの占領期をカバーしており、日本の主要都市、都道府県レベルの地方新聞に加え、東京の主要新聞（日本語）の完全なファイルも含んで

おります。手短かに言えば、このコレクションの三分の二は日本全国から集められた新聞で成り立っており、そのため、カバーする範囲がすみずみまで、かつ広範囲にわたっているのです。またこの新聞コレクションの中には、1946年から1949年の間の、世界で最も完璧な、日本の共産主義者の新聞コレクションも含まれており、実際、ここ東京の共産党本部よりも多くの資料が、このコレクションの中にはあるのです。このコレクションは全く疑いなく、日本におけるこの時期の共産主義者のイデオロギー、プロパガンダ、方法論等の研究にとって最もすぐれた情報源になるでしょう。

d. その他の資料

上記資料に加えて、他のいくつかの資料にもクエスチョンマークをつけていることもお気づきだと思います。それらの資料は、現在「極秘」と分類されており、したがって、だれが手に入れたとしても、今回は船積みすることができません。しかしながら「極秘」扱いが解除される可能性はありますし、今、まさにこの件に関してウィロビー少将への申し立てを準備しているところです。また私は、「コメントシート」というタイトルのついた CCD の書式の 1 ページ目の項目にクエスチョンマークをつけていますが、この資料は検閲済みの手紙のファイルで、日本人が占領初期の四年間に、アメリカ人に対してどう思っていたかを知る世界で一番の指標になるかもしれません。この資料はよく収集、整理されており、占領期の日本を研究するあらゆる人にとって、素晴らしい情報源になるでしょう。

他にも、私がメリーランドの図書館のために目を通した資料が、この CCD コレクションの中にありますが、今この手紙でそれを議論する時間はありません。

私がこれまで説明した CCD 資料は、多くの点において、日本の占領期のもっとも価値ある収穫であり、もし我々がメリーランド大学図書館のためにこの資料を手に入れたなら、それは我々の大きな誇りとなり、大学図書館は即座に大きな名声を得ることでしょう。というのも、当コレクションはただ傑出したコレクションであるにとどまらず、めずらしいものだからです。個人的に、私はこの資料を手に入れることに非常な関心を払っており、実際、私はここ 2 ヶ月の間毎日のように、資料入手のための方法や手段を考え、ウィロビー少将や、彼のまわりの、この問題に密接に関わりのある何人かの人々と議論しております。あなたもまた私と同様に、これら資料を獲得することに関心を払ってくださることを希望しかつあなたがそうしてくださることを確信しております。な

ぜなら私は、これら資料が値段のつけられないほど貴重であること、フーバー戦争図書館がこの貴重なコレクションを手に入れるべくあらゆる犠牲を払うであろうことを知っているからです。以前の手紙で申し上げましたように、私は大学のため、アメリカの中でも太平洋戦争と日本の占領に関する最もすぐれたコレクションの一つを獲得するべく、自分の力の及ぶ限り、あらゆることを行っております。これは短期の計画ではなく、私が日本にいる限り、さらには私が大学に戻ってからも、私の時間の多くの部分を占めることになるでしょう。私の意見では、これはメリーランド大学にとって絶好の機会であり、それが実現するまでは、我々はあらゆる手段を尽くさねばなりません。もし私があなたからの返事を伺う前にこの資料に関する決定が下され、ウィロビー少将がメリーランド大学を選ぶ場合は、私はその決定を受け入れます。逃すにはあまりにも大きすぎるからです。これらの資料はどの図書館にとっても、最も傑出したコレクションになるかもしれません」

(後略)

この後は、それ以外の資料の収集についてもその希望を述べている。概略を紹介する。

- ・ 歴史課の図書館資料（太平洋戦争と日本占領に関する文書類・図書・小冊子等）
- ・ 歴史課に保管されている国際検察局の資料（戦犯の裁判に関する検察側及び弁護側により審理期間中に証拠として提出された各種文書。さらに戦争中に重要な役割を果たした日本陸海軍の将校の貴重な尋問記録）
- ・ ウィロビー少将の情報資料（図書及び書類、私的なファイル）
- ・ 日本の旧陸軍省、旧海軍省の記録資料、青焼き資料
- ・ 歴史課における莫大な尋問記録（300人から400人の陸軍・海軍の将官のインタビュー）
- ・ 日本での資料購入の状況

以上のような資料について述べた後、最後に再び氏は、以下のように資料の収集の重要性を訴え、筆を置いている。

「事態の進展は早く、私の提案に対する同意あるいは拒絶の回答を早急にいただければ好都合です。急がせるつもりはありませんが、速やかな準備が必要なのです。私はあなたが同意して下さることをどんなに望んでいるか、あなたの十分な支援がどれだけ重要であるかを言い尽くすことはできません。あなたが私と共に活動してくれるのなら、メリーランドがG II資料にとって最良

の場所であるとウィロビー少将に感じさせることができると信じています。私は奇跡を起こすことはできませんが、あなたの支援と協力があれば、私たちにとって予想以上のことができるかもしれません。私は現在及び将来のどんなときでも、あなたがメリーランドに偉大な大学を築き上げるのを支援するため私の力のすべてを注ぐことを信じていただきたいと思います。」

IV プランゲ関係参考文献

憲政資料室所蔵資料

マッカーサー文書 (MacArthur Papers)

原所蔵機関：マッカーサー記念館

請求記号：MMA-5 (Willoughby Papers) の内

Box9 Folder4 Prange, Gordon W. correspondence 1952-1965

1952年	12月11日	Willoughby	少将宛
1962年	11月3日	Willoughby	少将宛
同	12月4日	Prange	宛原稿
1963年	4月5日	Prange	宛原稿
1963年	4月7日	Prange	宛原稿
1964(?)年	3月30日	Prange	宛原稿
1964年	3月25日	Willoughby	少将宛
1964年	6月15日	Willoughby	少将宛
1964年	6月15日	Hamlett	将軍宛
1964年	6月20日	Prange	宛原稿
1964年	7月13日	Willoughby	少将宛
1964年	7月4日	Prange	宛原稿

特に、1952年の書簡はプランゲ氏とウィロビー少将の間の、歴史記述についての確執や、プランゲ氏の歴史家としての矜持が述べられており、興味深いものである。

プランゲ氏著作 (邦訳)

『トラトラトラ 真珠湾奇襲秘話』千早正隆訳 日本リーダーズダイジェスト社 1966 < 210.75-cP89t >

『トラトラトラ 真珠湾奇襲秘話』千早正隆訳 日本リーダーズダイジェス

- ト社 1969 < GB547-9 >
『ミッドウェーの奇跡』(上)(下) 千早正隆訳 原書房 1984
< GB547-137 >
『ゾルゲ・東京を狙え』千早正隆訳 原書房 1985 < GB521-383 >
『真珠湾は眠っていたか 1 運命の序曲』土門周平・高橋久志訳 講談社
1986 < GB531-229 >
『真珠湾は眠っていたか 2 世紀の奇襲』土門周平・高橋久志訳 講談社
1986 < GB531-229 >
『真珠湾は眠っていたか 3 歴史の審判』土門周平・高橋久志訳 講談社
1987 < GB531-229 >
『トラトラトラ 太平洋戦争はこうして始まった』千早正隆訳 並木書房
1991 < GB541-E75 >
『トラトラトラ 太平洋戦争はこうして始まった』千早正隆訳 新装版 並
木書房 2001 < GB541-G119 >

図書

- GHQ 参謀第 2 部編・竹前栄治解説『マッカーサーレポート = Reports of
General MacArthur』全 4 巻 現代史料出版 1998 < GB541-A89 >
鈴木幸久「図書館に生きて」『鈴木幸久先生喜寿記念論集』刊行会編『鈴木幸
久先生喜寿記念論集』2001 p.6-11 < GK132-H1 >

雑誌掲載論文

合庭惇

- 「電子出版の周辺 (50) プランゲ文庫」『出版ニュース』1901号 2001.4
< Z21-164 >

有山輝雄

- 「プランゲ文庫の守り手 村上寿世さんをしのぶ」『出版クラブだより』390
号 1997.7 < Z21-245 >
「戦後ジャーナリズムと民衆の歴史の交錯——プランゲコレクションが示す
もの」『新聞研究』462号 1990.1 < Z21-88 >

池本幸雄

- 「プランゲ文庫と国立国会図書館 (特集 プランゲ文庫)」『国立国会図書館月
報』462号 1999.9 < Z21-146 >

大橋祥宏

「プランゲ文庫とワシントン DC の博物館群」『出版クラブだより』354号
1994.7 < Z21-245 >

奥泉栄三郎

「プランゲ文庫（上）—連合国日本占領期検閲資料—」『日本近代文学館』第
60号 1981.3 < Z21-923 >

「プランゲ文庫（下）—連合国日本占領期検閲資料—」『日本近代文学館』第
61号 1981.5 < Z21-923 >

「メリーランド大学所蔵 GHQ 検閲資料抄」『諸君』14(2) 1982.2
< Z23-148 >

「プランゲ文庫——負から正の文化遺産へ」『図書館雑誌』83巻8号 1989.8
< Z21-130 >

「トラ・トラ・トラ」の行方とその周辺—歴史家 G・W・プランゲの叙述手
法』『出版研究』30 日本出版学会 1999 < Z21-279 >

古園井昌喜

「史料紹介「プランゲ文庫にみるスポーツ記事について」」『久留米大学保健
体育センター研究紀要』7号 1999.9 < Z22-B18 >

「史料紹介「プランゲ文庫にみる戦後復興期の企業公式野球部」」『久留米大
学健康・スポーツ科学センター研究紀要』8号 2000.12 < Z22-B18 >

小沼良成

「編集長インタビュー（324）文生書院社長・小沼良成—マイクロフィルム化
で甦る「プランゲ文庫」の歴史的価値」『週刊ダイヤモンド』87(49) 通号
3810号 1999.11.27 < Z3-85 >

坂口英子

「占領下の日本の出版物何でもあります——アメリカ合衆国メリーランド大
学カレッジパーク校プランゲ文庫所蔵図書とパンフレットについて」『図書
館雑誌』96巻11号 2002.11 < Z21-130 >

「プランゲ文庫の占領期資料：その生い立ち」『時の法令』通号 1688号
2003.4.30 < Z2-50 >

「プランゲ文庫の占領期資料：その構成」『時の法令』通号 1690号 2003.5.30
< Z2-50 >

「プランゲ文庫 検閲について」『時の法令』通号 1692号 2003.6.30
< Z2-50 >

「プランゲ文庫 検閲について (2)」『時の法令』通号 1694 号 2003.7.30
< Z2-50 >

「プランゲ文庫 原爆と検閲」『時の法令』通号 1696 号 2003.8.30
< Z2-50 >

「プランゲ文庫の周辺資料 (1) GHQ 関係者の個人所有文書」『時の法令』通号 1698 号 2003.9.30
< Z2-50 >

「プランゲ文庫の周辺資料 (2) ATIS 文書と一般寄贈資料」『時の法令』通号 1700 号 2003.10.30
< Z2-50 >

「プランゲ博士について (1) 「プランゲと真珠湾」」『時の法令』通号 1702 号 2003.11.30
< Z2-50 >

「プランゲ博士について (2) 「運命の不思議」」『時の法令』通号 1704 号 2003.12.30
< Z2-50 >

「プランゲ博士文庫 資料の経済的価値とは？」『時の法令』通号 1706 号 2004.1.30
< Z2-50 >

鷺谷克良

「「プランゲ文庫」のデータベース化の意味と第 2 次大戦直後の経済・産業団体のコミュニケーション研究」『CUC view & vision』15 号 2003.3
< Z4-B84 >

谷暎子

「名寄の『中学生タイムス』と『学校ニュース』-プランゲ文庫所蔵の占領期検閲新聞から」『地域と住民』18 号 2000.4
< Z8-2137 >

「プランゲ文庫にみる北海道の児童雑誌、児童新聞-文芸雑誌『北の子供』と科学新聞『子供の国』- (特集：占領期研究の成果とプランゲ文庫)」『Intelligence』第 3 号 2003.10
< Z71-G814 >

谷川健司

「占領期の対日スポーツ政策-ベースボールとコカ・コーラを巡って- (特集：占領期研究の成果とプランゲ文庫)」『Intelligence』第 3 号 2003.10
< Z71-G814 >

鳥井幸雄

「夢を売る人-メリーランド大学所蔵〈プランゲ文庫〉展開催報告」『月刊 IM』38(3) 通号 338 号 1999.3
< Z17-481 >

中川正美

「原爆報道と検閲- (特集：占領期研究の成果とプランゲ文庫)」

『Intelligence』第3号 2003.10

< Z71-G814 >

中司文男

「山口県史編纂とプランゲ文庫—『山口県史 史料編 現代3』の編集を通じて— (特集: 占領期研究の成果とプランゲ文庫)」『Intelligence』第3号 2003.10 < Z71-G814 >

春原昭彦

「戦後ジャーナリズム史研究に貴重なプランゲ文庫」『新聞研究』1981.12 < Z21-88 >

福島鑄郎

「占領下日本の出版物をたずねて〔州立メリーランド大学〕マッケルディン・ライブラリィ イースト・アジア・コレクションからの報告」『日本古書通信』38(10) 1973.10 < Z21-160 >

「占領下の出版検閲資料—メリーランド州立大学図書館所蔵目録刊行計画—」『出版ニュース』1977.11 < Z21-164 >

「ゴードン・W・プランゲ文庫との出会い」『出版クラブだより』406号 1998.1 < Z21-245 >

藤巻正人

「米国メリーランド大学プランゲ文庫新聞プロジェクトに携わって (特集 プランゲ文庫)」『国立国会図書館月報』462号 1999.9 < Z21-146 >

古川純

「占領下におけるGHQの出版検閲」『出版クラブだより』286号 1988.11 < Z21-245 >

堀真清

「プランゲ文庫漫遊—長谷川如是閑の告白と再生にふれて (特集 戦時期・占領期の一次資料による研究調査の現在) — (特集1 プランゲ文庫)」『Intelligence』創刊号 2002.3 < Z71-G814 >

松浦 総三

「占領下の言論抑圧,27年目の証言—メリーランド大学にあるGHQ検閲の墓場から」『総合ジャーナリズム研究』9(3) 1972.7 < Z6-8 >

宗像和重

「プランゲ文庫データベースと近代文学研究—武者小路実篤、志賀直哉の newly 資料を中心に (特集 戦時期・占領期の一次資料による研究調査の現在) — (特集1 プランゲ文庫)」『Intelligence』創刊号 2002.3 < Z71-G814 >

村上寿世

「プランゲ文庫について・第一報」『出版クラブだより』338 1993.3

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第二報 悲惨な戦争から生き残った日本の歴史」
『出版クラブだより』342号 1993.7

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第三報 新聞の項」『出版クラブだより』349号
1994.2

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第四報 新聞の項 つづき」『出版クラブだより』
338号 1994.7

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・番外編 検閲局・四十五年目の証言」『出版クラブ
だより』357号 1994.10

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第五報 雑誌の項」『出版クラブだより』363号
1995.4

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第六報 雑誌の項 つづき」『出版クラブだより』
366号 1995.7

< Z21-245 >

「プランゲ文庫—占領軍検閲局に残された日本の出版物」『図書館雑誌』日本
図書館協会 89巻8号 1995.8

< Z21-130 >

「プランゲ文庫について・第七報 ミニ日米交渉」『出版クラブだより』375
号 1996.4

< Z21-245 >

「プランゲ文庫について・第八報 楽譜の項」『出版クラブだより』385号
1997.2

< Z21-245 >

「プランゲ文庫研究会（平成10年6月10日）チャールズラウリィ博士らと
の懇談会 —村上寿世さんを偲ぶ—」『出版クラブだより』402号 1998.7

< Z21-245 >

< Z21-245 >

山田邦夫

「占領期検閲雑誌の整理・保存事業について（特集 戦時期・占領期の一次資
料による研究調査の現在）—（特集1 プランゲ文庫）」『Intelligence』創刊
号 2002.3

< Z71-G814 >

山本武利

「占領期雑誌目次データベースの作成—プランゲ文庫の活用を旨として（特集
戦時期・占領期の一次資料による研究調査の現在）—（特集1 プランゲ文
庫）」『Intelligence』創刊号 2002.3

< Z71-G814 >

「巻頭随筆プランゲ文庫のデータベース」『外交フォーラム』4巻15号

2002.4 < Z1-440 >

「占領下のメディア検閲とプランゲ文庫」『文学』4巻5号 2003.9.25

< Z71-D437 >

その他

竹前栄治; 袖井林次郎; 福島鑄郎他「座談会 占領期研究の蓄積を再検証する
— (特集: 占領期研究の成果とプランゲ文庫)」『Intelligence』第3号

2003.10

< Z71-G814 >

シンポジウム・展示会解説類

ニチマイ編『メリーランド大学所蔵プランゲ文庫展記念図録』ニチマイ
2001 < UM71-G4 >

早稲田大学「占領下の子ども文化「1945-1949」展」実施委員会編『占領下
の子ども文化: 1945-1949 メリーランド大学所蔵・プランゲ文庫「村上コ
レクション」に探る』ニチマイ 2001 < GD1-G217 >

沖縄県平和祈念資料館編『占領下の子ども文化展<1945～1949>: メリーラ
ンド大学所蔵プランゲ文庫「村上寿世記念児童書コレクション」に探る:
沖縄県本土復帰30周年記念第3回企画展』沖縄県平和祈念資料館 2002

< Y121-H43 >

< > 内は国立国会図書館請求記号

(当館未所蔵文献)

プランゲ文庫展展示目録作成委員会編『メリーランド大学所蔵「プランゲ文
庫」展: アメリカにあった、日本の戦後』早稲田大学 1998

広島平和記念資料館編『メリーランド大学所蔵「プランゲ文庫」展: 活字から
見る占領下の日本——プレスコードと広島——』広島平和記念資料館 1999

立命館大学国際平和ミュージアム編『特別展メリーランド大学所蔵「プラン
ゲ文庫」展: 展示資料目録』立命館大学国際平和ミュージアム 1999

プランゲ文庫展記録集編集委員会編『占領期の言論・出版と文化—〈プラン
ゲ文庫〉展・シンポジウムの記録』早稲田大学・立命館大学 2000

(おおしま こうさく 主題情報部政治史料課)

(ふじわら なつと 主題情報部政治史料課)

(なかむら じゅんいち 主題情報部人文課)